
文珠使いになってハンタ世界へ

二等兵ライデン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文珠使いになってハンタ世界へ

【Nコード】

N1143U

【作者名】

二等兵ライデン

【あらすじ】

YOKOSHIMAのスペックをもらった代償に死亡フラグ満載の世界に送られてしまったTSオリ主。おまけに原作に関わらないと即死という呪い付き。仕方なく原作に介入するため行動を開始します……。

No.001 「邂逅（一歩手前）」（前書き）

衝動で書きました。反省はしてませんが後悔はしてません。

というかTSオリ主がチートです。リアリティ追求と趣味嗜好を反映したら、富樫クオリティ的にノクターンで凌辱指定間違いなしなので、軽めのノリでいかせていただきます。

「死んじゃった……」

「殺しちゃった」

「NA

ME N N A！」

「転生させてあげりゅ

特典もあげち

やウ！」 「GSの横島の霊能やら肉体スペック（才能含む）

を望む水準でください」

「いいよ」

「うっしやあー

ッ、コレでカツル！」

「じゃ相応に死亡フラグ満載の世界

に転生ね」

「マジで？」

「原作にはちゃんと

関わってね！ 適当な日時に送るから、逃げたら即消滅だもん」

「オワタ、（^o^）ノモウ疲レタヨ、パトラッシュ……」

とまあ、こつという理由でワタクシは『ふんてーxふんてー（ローマ字読み）』の世界に転生しちまったい……。

フウハハハ、マジで呼吸するだけでプロテインと死亡フラグを肺に取り込むような世界に来てしまいましたヨ、あの野郎。今いるのは人通りのまばらな昼下がりの公園、噴水の縁に腰掛けれます。

転生　なのかも微妙かな？　正確には超絶ナイスボディの美少女に憑依っぽいんですが、容貌の特徴が作者繋がりなのか、『絶対可憐チルドレン』のファントム・ドーターこと雲居悠理に似てるのは気のせいだろうか。

この世界に現界する際に構築されたニューボディという線もあるので、『転生（仮）』としておこつ。どうせ定義とか大差ないだろ

うし、興味ないし。

問題はTS転生という変化球路線だというのに身体に一切違和感がないことすな。ホントに違和感ないんデスヨ。マジで。お漏らしや生理で混乱する羞恥プレイもなさそうですよH A H A H A。

取り敢えず、服装をチェックする。白いブラウスに赤いリボンタイ、濃紺のロングスカート、上腕部まで両手を覆う黒絹の手袋と、足には同じ素材のストッキング、靴は衣類同様に上等なパンプス。財布があつたので中をちらつと確認したら、紙幣がいっぱい入つてた。うーむ、当座は大丈夫っぽいね。身分証明書にはシエリー＝ブーンって書いてる。これが名前か（ハンター文字は素で暗記してたりする）。

取り敢えず、飢えと渴きの心配はなくなったわけだ。衣食足りた次は住まい、ではなく現状に突っ込みだ。安心したらやらすにはおれんでしょーよ。

そもそもハンタ世界に転生でチートとか世界観的にマジつまんないわなにをするやめくあwse dr ft gyふじこerp

……………さておき、えーと、うん……………女でハンタ世界つてどこの夢小説ですかって感じですよ？ ね？

お約束である「幻影旅団」・「ゾルディック家」に接触して、逆ハーレムって展開ですか？

それだけはまったくまるつきり、スゲエ、ねえでしょ、絶対。うん、ホント、ないわあ……………。

いやね、別に元男の身で野郎と恋愛したりセクロスするのに気色悪さとか感じてないんですよ、それはこの際、どうでもいいことなんです。実感ないから。

白状すると生前、いや今も生きてるや……………前世でだけど、生身の人間相手に興奮とかそっち方面に情動の針が傾いたことってないん

で。つまりはまあ、恋愛はおろか性交渉つてのにも別に興味もない
つてことで。

問題は女の身でこの世界に転生したつてことですよ。しかもバリ
バリのナイスバディ。

YOKOSHIMAアイは女体解析力、なんか女性の身体を見る
だけでスリーサイズや年齢が判るといふ無駄スキルによって、肉体
年齢14歳のこの身体がバスト89・ウエスト53・ヒップ87つ
て常識的に見てもかなり素晴らしかるうスペックというのが解つて
しまうのだ。

おまけに容姿は癒し系美少女、だと……？ そんなボクが富樫
クオリティ世界に放り出されたらば、

「誘拐される」 「オークションに出品される」 「変
態に落札される」 「性奴隷への道」 「飽きたら臓器プ
ローカー逝き」

なーんて、基本にしてありがちな末路を辿るのは目に見えてるじ
やないか。これ鉄板。

前世で読んだ女オリ主・夢主のハンタの二次創作つてだいたい、
クロロ、ヒソカ、イルミ、ゼノ、シルバ辺りに「何故か」、「不思
議なことに」、「気に入られて」、「恋愛関係になる」つて謎の化
学反応で超展開。

ないない、ソレはないでしょーよ。既知外が服を着て歩いてると
いうか、ニュークリアな兵器が自由意思を持って闊歩してるとい
うか、世界トップクラスの危険人物相手にそういうフラグ立つとかマ
ジあり得ない……。

富樫クオリティを舐めすぎるとしか思えないよ。関わり合いに

なつたら百害あつて一利無し、というか即死か生き地獄の二択な連中だと思つボクは決して間違つてない、はずだ。

まあ、遭遇しない限りはどうつてことないんだろうけどさ。原作に関わらないと死亡確実っぽいから遭遇しちゃうんだろうな。嫌だなあ……主人公たちと接触するのは面白そうなんだけども。

あー………そういえばカメラアクト編とかも絶望的としか思えない話の流れだし、いつそ大幅に介入するか？

アリの方はテロ屋の二つ三つ雇つて高空から巢に薔薇爆弾を絨毯爆撃で事足りそうだけど、物語的な妨害がないとも限らないし、いろいろと保険かけてないと安心できないよね。

うーん、悩むほどプランが豊富にわるわけじゃなし……動くか。ボクはさっさと公園を後にする。

適当なホテルに宿泊し、電腦ページで現在日時と場所を確認、と場所はくじら島で日付は2000年の1月2日、だと!？

うわー………これは原作二話から合流しろつてこつてすね。他にどないせーと？

ボクは溜息を吐くと、船便のチケットを購入し、早めの夕食を摂つてそのまま就寝した。

次の日は半日かけて時間まで試験対策の買い物をし、船に乗るまでの間、ホテルの部屋に《加》《速》《空》《間》の文珠で「精神と時の部屋もどき」を構築、その中で霊能のチケットと、念の修業をしてみる。

最初はよくわからない。当然だ。ボクは知識があつても実践なんて経験皆無なんだし。文珠だつて「出る」つて思つたら自動的にストック分？ が手に出現した感じだし。なので、《解》《析》で自

分のスペックを把握。文珠チート乙。

おかげで霊力の発生・増幅や『サイキックソーサー』、『ハンズオブグロリー』も使えるようになったし、精孔とオーラを認識して【纏】【絶】【錬】まで脱力するほどトントン拍子で修得できちゃったよ……。どんだけご都合主義なんだ文珠。使ってるボク自身が呆れてるんだぞ。

文珠の生成は霊力の消費なしだと一日三個……多いと取るべきか少ないと取るべきか、チートアイテムとして考えたらデタラメな生産量なんだけど、こんな危険な世界だと逆に少ないと思うのは気のせいなのかなあ？

文珠に頼らないでも生きていけるだけの実力を早く身に付けないとなあ……。今の実力だとハンター試験くらいは余裕っぽいけど、幻影旅団辺りなんかと遭ったら、一番弱そうなコルトピ相手にも負けそうだし。

これはもう、「精神と時の部屋もどき」で修業時間を稼ぐしかないか。

はあ……。そりゃね、チートな能力を強請ったのはボクの自己責任だけど、だからってこんな世界で原作に関わられて致命的でしょ。ギリギリギリ（歯軋りの音）。

こうなったら、試験が終わってからはククルーマウンテン編の後に全員巻き込んで魔改造ばりに一緒に修業するしかない！

彼等についてかないと死ぬっぽいし、なら自分が強くなるのと同じ時に彼等にも強くなってもらわないとね。打算バリバリだけど、ボクだって死にたくないのだ。死ぬくらいなら霊能とか捨ててもいいんだけどさ、もう後の祭りだしね……。ちくせう。

そうして悪女の企みに一通りの結論が出ると、「精神と時の部屋もどき」を解除後、船便までの時間を寝て過ごした。

翌日、モーニングコールに起こされたボクは航海中の食糧を買い込むと、キャリーケースを引き摺ってドーレ港行きの船に乗り込んだ。

船縁から緑豊かな島の景観を眺めていると、

「元気でねー！！ 絶対立派なハンターになつて戻ってくるからー！！」

なんてアニメで聞き覚えのある澆刺とした声が聞こえてきた。うん、主人公ですね、わかります。

眼の精孔が開いているボクは主人公であるゴンを視界に収め、目を凝らした。まあ、【凝】を使わなくてもゴンのオーラが力強く、鮮やかな明るさを発しているのが判るんだけどね。

流石は強化系、特質系（ちなみに寝る前に水見式をした。そりゃ能力が横島なら当然か、と納得すると同時に脆弱なイメージもあったので凹んだりした）たるボクとは対極に位置する系統、ちよっと圧倒されちゃったりする。

「くつくつくつ、立派なハンターか……なめられたもんだな」

そんなことを思っていると、ゴンのハンタ世界のおアシス的な別れに水を差す、無粋な嘲笑が耳に入る。うわぁー、うざぁーい。

容姿が美少女だから人目とか気配とか気にしなかったから捨て置いたけど、ボクの周囲には何人もの雑魚っぱちな受験者たちがわらわらとたむろしていた。

「この船だけで十数人のハンター志望者がいる。毎年全国からその数十万倍の腕利きがテストに挑んで、選ばれるのはほんの一握り」

知った風なセリフを得意げに語る雑魚その二。それに続いて、他

の受験生たちも嫌らしい笑みを浮かべてゴンを嘲っていた。

「狙う獲物によっては仲間同士の殺し合いも珍しくねエ職業だ。滅多なことを口にするもんじゃねーぜ……ボウズ」

「……」

ゴンってば大人だあー。雑魚のセリフに思うところがないはずなのに、嫌な顔もせず（それでもちよっぴり表情が硬かったけど）無言を通して中に入っていた。

ボクは【絶】でその場を離れると、クラピカ同様にハンモックを懸けてお昼寝タイムです。当然、襲われても対応できるように【纏】をし、文珠も《護》の文字でポケットに入れておく。

さてさて、主人公たちと話すのは起きてから起きてから……。ボクはハンモックの上で毛布にくるまり、すやすやと午睡を堪能した。

No.001 「邂逅（一步手前）」（後書き）

ノクターンだったら操作系の工口念能力なんて仕様ですよ。

それこそ性奴隷間違いなしなノリで。それが富樫クオリティだと信じています。

あとと思うんですが、ハンタ世界では原作に介入しようなんて思わなきゃ絶対に原作キャラと遭遇しないと個人的に愚考しちゃってます。こんな広い世界で原作に関わる施設や場所に行かない限り、偶発的に遭遇するなんて天文学的な確率じゃないかと。まあ、それだの話が進まないというか、ハンタ世界の意味がないってことでしょうか。

No.002 「邂逅（いきなり踏み外したり）」（前書き）

コミックスを読み返してみると、この頃のレオリオってモブキャラの臭いがプンプンしてますね。いや、そこがいいというか、好きなキャラなんですけどね。

No.002 「邂逅（いきなり踏み外したり）」

『これからさっきの倍近い嵐の中を航行する。命が惜しい奴は今すぐ救命ボートで近くの島まで引き返すこつた』

起きたらすでに十把一からげの他の乗客たちが下船していました。ボクにも降りないか直接訊かれたけど謹んで辞退する。

その後すぐに残った三人の受験者　つまり主人公面子と一緒に船長の前に集合した。

うーん、おかしいな、レオリオの側に背後霊が見える……あ、彼と眼があった！　ビックリして会釈する。向こうも驚いたのが口をぽかーんと開け、会釈する。

……………スルーしよう。そうしよう。

「結局客で残ったのはこの四人か。名を聞こう」

「オレはレオリオという者だ」

「オレはゴン！」

「私の名はクラピカ」

「シェリーと申します」

あ、ちなみに身長は、レオリオ > クラピカ > ボク >

ゴン、となつている。まあクラブカとの身長差は3cmもないんだけどね。

「お前ら、何故ハンターになりたいんだ？」

「……？　おい、えらそーに聞くもんじゃねーぜ、面接官でもあるまいし」

「いいから答えろ」

「何だと？」

船長の有無を言わせぬ高圧的な物言いに對し、レオリオの声に不機嫌さが混じつた。

ボクは基本的に原作知ってるからどうってことないけど、いきなりこういふ態度に出られたら苛立ってしまうのだろうなあ。まあ、抑えられる程度のもだから表には出さないけど、きつと眼には出るね。と、若干の険悪な空気が漂ったかと思うと、ゴンが割り込むように手を上げて元気な声で答えていた。

「オレは親父が魅せられた仕事がどんなものかやってみたくなつたんだ」

「おい待てガキ！！　勝手に答えるもんじゃねーぜ、協調性のねー奴だな」

「いいじゃん、理由を話すくらい」

「いや、ダメだね。オレは嫌なことは決闘してもやらねえ」

「私もレオリオに同感だな」

レオリオの意見にクラピカが同調する。しかし、

「偽証は最も恥ずべき行為であり、しかし初対面の人間に正直に話せる志望理由ではない。よってこの場で質問に答えることはできない」

いきなり呼び捨てにされたレオリオの文句をBGに、クラピカは真つただけどちよつとスカした。もとい、冷静さと誠実さを兼ねた意見を述べる。

その返答を聞いた船長は眼を細め、挑発するような声音で言葉を告げた。

「ほーお、そうかい……それじゃお前らも今すぐこの船から降りな」
「何だと？」

「まだ判らねーのか？　すでにハンター試験は始まっているんだよ」
そして船長の説明は原作通りだった。

ハンター試験の受験者数の多さに比して少ない試験官の人数。そこから試験会場まで志望者をふるいにかけるシステム。先ほど脱落した受験者たちはすでに本部に報告されてリタイヤが確定しているという事実。

「お前らが本試験を受けれるかどうかはオレ様の気分次第ってことだ。細心の注意を払ってオレの質問に答えな」

暫しの沈黙が流れる。

まあ、下手なことを言えば失格となれば、明確な志望動機を持つレオリオとクラピカはまともに応えざるを得ないわけで。

そして、言わなかったらボクの見解はかなり先送りなんだろうな。一応先に言っておくか。

虚偽100%だけどね！ 念のために《演》の文珠を使ったボクはチキンです……。

「ボクの志望動機はハンター証の取得が主ですね。無くても困りませんが、現状でハンターを名乗るならアマチュア扱いですし、やはりプロの方が信用度も高いので」

「えっ？ ハンター試験に受かってないのにハンターって名乗っちゃうの？」

「はい。私を含めて世の中には自称ハンターなんて掃いて捨てるほどいるんですよ。実力さえあれば仕事には困らないんで、別に試験合格者である必要もないです。もっとも、ハンター証の有無で情報収集能力も雲泥の差なので、あるに越したことはありませんけど」

「ほお、お嬢ちゃんはその年で、アマチュアながらもハンターやってるってのか。ちなみに何のハンターだ？」

「……ゴーストハンターです。詐欺師が蔓延するジャンルなので胡散臭く映るでしょうが……」

ボクはおもむろに掲げる掌にサイキックソーサーを展開する。

『っ！？』

「わぁーっ！ シェリーさんっ、それなにっ！？」

「ええとですね、いわゆる霊能力というものです。仕事柄、悪霊退治もすれば死者の除霊もします。これも一応は商売道具の範疇に入るので、もう少し仲良くなってから教えますね」

「うん、わかったっ！！」

ゴンが無邪気に喜ぶ。クラピカとレオリオは呆然とサイキツクソーサーを眺めている。

船長は見たところ非念能力者だが知識はあるのか、文珠によるチートな演技力と合わせて納得してくれた。

クラピカは好奇心、レオリオは胡散臭さを滲ませる中、サイキツクソーサーを消す。

ちなみにレオリオの背後の人がホツとしたのが見える。そういえば威力考えたら威嚇行為だったな。目線で謝っておいた。

当のレオリオ自身はあまり信じてないっばいけど、クラピカはあとで質問されそうだなあ。

そんなことを思っていると、原作通りにクラピカが先に志望動機を口にする。

「私はクルタ族の生き残りだ。四年前、私の同胞を皆殺しにした盗賊グループ、幻影旅団を捕まえるためハンターを志望している」

「賞金首狩り志望か！ 幻影旅団はA級首だぜ。熟練のハンターでもうかつに手を出せねエ。ムダ死にすることになるぜ」

「死は全く怖くない。一番恐れるのはこの怒りがやがて風化してしまわないかということだ」

ギラつくような眼に映る光は本気の二文字が窺える。

客観的視点で言わせてもらえば生産性のない行為に尽きる動機なのだが、こういう場合は当事者にもならないと絶対に理解なんてできないわけで、ボクごときが復讐の不毛さを説いても言葉に重みもなければ薄っぺらいだけだろう。

実際、当事者に取ってみれば不毛でも無意味でもないだろうしね。綺麗事で取り繕わないのなら、全体的に支持する動機である。

「要は、敵討ちか、わざわざハンターにならなくたって出来るじゃねーか」

「この世で最も愚かな質問の一つだな、レオリオ。先ほど彼女も言っていただろう。ハンター証の効果を。ハンターでなければ入れない場所、聞けない情報、出来ない行動というものが、それこそキミの脳みそに入りきらない程あるのだよ」

完全にレオリオを見下した偉ぶったセリフである。まあ、この時点ではチンピラ予備軍で三下臭な三枚目キャラだからしょうがないか、初対面だしね。

そしてクラピカは博覧強記の秀才クンタイプだからなあ。そういえば船のイベント後は多少丸くなっていたので、レオリオの外見とギャップのある男気はクラピカの言動に多少の影響を与えたってことかな。

「おい、お前は？ レオリオ」

船長のパスに、レオリオはこれまた大仰に両手を広げ、自慢気に飯の動機を話した。照れ隠しですね、判ります。

「オレか？ あんたの顔色をうかがって答えるなんてまっぴらだか

「正直に言っぜ！ 金さ！！ 金さえありゃ何でも手に入るからな
！」

「品性は金で買えないよ、レオリオ」

露悪的な態度で成金三種の神器を挙げたところで、冷やかに軽蔑を含んだ一言がクラピカの口から発せられる。

一触即発の空気が室内に充満した。クラピカの言葉にレオリオは怒りを隠そうともせず（もともと顔に出まくりだったが）クラピカを睨みつけ、決定打の言葉を紡ぐ。

「……三度目だぜ。表へ出な、クラピカ。うす汚ねエクルタ族とかの血を絶やしてやるぜ」

さらに空気に重さと冷たさが加わり、背中につうつ、と冷や汗が流れる。クラピカの怒りはレオリオのそれ以上の圧力を迸らせていた。

「取り消せレオリオ……」

「レオリオ、さ、ん、だ」

迷うことなく二人は甲板へ向かった。

船長は試験放棄を盾に慌てた様子で止めに入ろうとするが、それを止めたのはゴンの一言だった。

「放っておこつよ」

「な……」

「『その人を知りたければ、その人が何に対して怒りを感じるかを知れ』。ミトおばさんがおしてくれただオレの好きな言葉なんだ。オレには、二人が怒ってる理由はとても大切なことだと思えるんだ。止めない方がいいよ」

「う……む」

「男の子には意地を張らないといけない場面がありますからね。ま、いざとなったらボクが止めに入りますので、やらせてあげて下さい」

にっこりと満面の笑顔を浮かべる。ボクの霊能力を念能力と誤解している船長は、なら大丈夫か、と納得したのか、口ではなく眼で物語る。吐いた唾は飲めねえぞ、と。

仮に万一、致命傷を負っても文珠で治せるから、どうということはないだろう。ボクは黙礼すると、二人を追って甲板に向かった。

外では、一息で詰められる距離を挟んで二人が対峙していた。上からは雨風、横合いからは波飛沫が彼等に殺到し、すでにびしょ濡れだった。

ボクはわずかに【錬】をして水滴を弾く。オーラ量はまだまだだけど、どうせ一次試験まで戦闘する気はない。よって使い切っても問題ないので衣類も【周】で多い雨具いらずで外に佇み続ける。

そして周りでは船員たちが慌ただしく動いていた……………邪魔にならないように隅っこに移動しようと。

「船がひっくり帰るぞっ！！ 帆を上げろ！」

「急げ！！ マストがもたないぞっ！！」

『そおーれえっ!!』

そんな船員たちを完全に無視して、二人は相對する男を睨み据える。

「レオリオ、今すぐ訂正すれば許してやるぞ」

「てめえの方が先だクラピカ、オレからゆずる気は全くねエ」

レオリオは懐から折り畳み式のナイフを取り出し、クラピカも貫頭衣からヌンチャクもどきの木刀を取り出した。

そういえばああいう得物を持つてたっけ。念能力が売りとなっている物語なので、未修得時の得物とか印象薄いんだよねえ。クラピカ「鎖つてイメージになつてるし。

そんなことを考えてると、ゴンと船長が甲板に出てきた。

「こりやべえな!! 海に落ちたら浮かんでこれねエぞ」

怖いこと言わないでよ……。

「船長、オレも何か手伝う!!」

「よし、来い」

ええ子や。それに引き替え、

「行くぞ!!」

「来やがれ!!」

コイツラは……まあ、どっちも前世の世界じゃ高校生だからしょうがないのか。むしろゴンが良い子過ぎる。

そして原作通りにクラピカが駆け出した瞬間、強風に帆を張っていたマストが耐えきれず、木がものすごい音を立ててへし折れた。

「うわあああつー!!」

『!』

折れたマストやら破片がものすごい勢いで船員に向かって飛翔し、それにレオリオとクラピカの両者も気付く。

しかし、無情にもそれらは船員を直撃する。

ボクが助けてもよかつたけど、余計な介入して原作面子の距離が開いたら、即死はないだろうけど死亡率が高まりそうなので見逃した。あとでちゃんと治すから許してね!

「カツツオ!!」

『!』

直撃した船員はそのまま強風もあって宙に浮き、海の彼方へと吹き飛んでゆく。

「チィッ」

舌打ちとともに、クラピカに背を見せてレオリオは船員の方へ全力疾走した。クラピカじゃなけりゃ後ろから刺されてるよね、絶対。

「……………」

クラピカも数瞬の黙考の後、すかさず走りだした。二人がほぼ同時に、縁から投げ出された船員の前に飛び込んだが、やはりと言うべきか、あと少して手が届かなかった。

そして、ゴンがその身を宙に投げ出し、両手でしっかりと船員の足を掴み取る。そのゴンの足をレオリオとクラピカが掴み取り、船員もろとも引き上げた。

「よくやったボウズ、ボウズ！！ 礼をいうぞ」

「あいてー、鼻うつちった」

鼻打ったぐらいで済んだんだよね、流石は野生児。

そしてゴンの行動に驚き過ぎた二人は満面に冷や汗を浮かべ、息を切らせて一斉に喋り出した。

「何という無謀な！！ 下は激速の潮の渦で、人魚さえ溺れるといわれる危険海流だと言うのに！！」

「そういえばこの世界って人魚っているの？」

「オレ達が足をつかまえなかったら、オメエまで海のモクズだぞ、このボゲー！！」

(そんなトコで決闘してたクセに)

そんな処で決闘なんぞしてた癖に……。

「でも、つかんでくれたじゃん」

無垢な信頼が覗くその言葉に、二人の目が点になった。

「あ……ああ、まーな」

「ね」

毒気を残らず抜かれたのか、先ほどまでの険悪な雰囲気は何処吹く風、レオリオとクラピカが恥ずかしそうにチラチラとお互いを見たてていた。

そして互いに顔を綻ばす。

「非礼をわびよう、すまなかつたレオリオさん」

「何だよ、水くせえな。レオリオでいいよ、クラピカ。オレの方もさっきの言葉は全面的に撤回する」

そんな二人を見て、ゴンは微笑んだ。男の子してるねえ。

ん？ おかしいな、本来ならそろそろ雨が止んで雲間から日が差すタイミングなのに。

その時、原作知識に胡座をかいていたボクに対する当てつけか、既知外の事象が発生した。

なんとさらなる強風で別のマストが折れ、先ほど同様に船員の一人が海へと投げ出されたではないか！！

ちよつ、ナニソレええええええ！？

気が付いたらハンズオブグローリーを伸ばしていた。

『！！！？』

伸びるほどに先が巨大化し、野球ボールをキャッチするように船員を掌に収めたライムグリーンの巨腕はゆっくりと甲板へと引き戻されていく。

『……………』

ボクはポーカーフェイスを保つのに最大限の労力を注ぎ込みつつも、カツツオを運ぶ途中の船員たちの前に掴み取った船員をゆつくりと下ろす。

……………フウハハハ、視線を釘付けですよ。あーもう、やっちなったい……………。

こつなりや焼けだ！ ボクは「治療します！」と叫び、怪我をした船員二名の下へ駆け寄ると、《治》の文珠を用いて治癒し、快復させる。

「怪我はこれで完璧に治りました。起きるまでは安静にしてあげて下さいね」

なんか船員たちから信仰する女神を崇める信徒のような視線を注がれるが、ボクは気にしない。気にしないっいたら気にしない。

「なあ、あんた今のどうやったんだッ!？」

「うきやあーっ!?!？」

何時の間にか詰め寄っていたレオリオに肩を掴まれ、思わず悲鳴を上げてしまう。女らしい悲鳴だなあ、などと冷静に自己分析しているのは現実逃避です。

「今の見てたけどよ、あんた、怪我してる二人を手を光らせただけで治しちゃったよなっ!?! どうやったたらそんなことができるんだ!?! 俺はこれでも医者志望なんだ! ハンター証がありや受験料

や学費免除だつてんでハンター試験受けに行くんだけどよつ、今の
を見せられたらこの場はそれどころじゃねえ。いったいどうやった
んだっ!? 頼む! 教えてくれっ!!」

一気に捲し立てると、土下座されてしまった。

観の眼で周囲を眺めると、ぼかーんとしたゴン、レオリオを見て
己の不明を恥じるような表情を浮かべるクラピカ、なんだなんだと
こちらを眺める船員たち、誰も助けてくれない……。

「ええと、教えるのは構いません。同じやり方であればあなたに出来るよ
うになるかは私もわかりませんが、努力次第で結果的に似たような
ことが出来るようになる可能性もありま」

「本当かつ!? ありがてえっ!! 感謝するぜ、お嬢さんっ!!」

「シェリー」

「え?」

「名乗りましたよね。シェリーって呼んで下さい。あ、私もレオリ
オ、クラピカ、ゴンって呼ばせてもらいますね?」

レオリオから視線を外し、残った二人にも笑顔で言い切る。

「是非そうしてくれ、シェリー」

「うん、いいよ! よろしくねシェリー!」

予定より早く念について教えることになったなあ……。ボクは内
心溜息を吐きつつ、レオリオを立ち上げらせる。

「ふ…くつくつくはははは！！ お前ら気に入ったぜ」

『？』

「今日のオレ様はすごく気分がいい！！ お前ら四人は、オレ様が責任もって審査会場最寄りの港まで、連れて行ってやらあ！！」

「あれ、でも試験は？」

「うれしくて忘れちゃったよ、それより舵取りの続きを教えてやる！！」

「うん！！ あ、シエリー！ あとで俺にも教えてね！」

「はい、もちろん」

元気に走り出したゴンをクラピカとレオリオとともに見つめ、三人で気持ちの良い笑顔を溢す。

ああ、やっと雨風がやみ、雲の隙間から陽の光と青空が覗いた。ボクって、なんだかんだでこういうノリが好きなんだね。柄にもなく本気で悪くないと思ってしまった。

No.002 「邂逅（いきなり踏み外したり）」（後書き）

試験会場前に【纏】覚えてもらうことになりそうです。

No.003 「転がる先の…」 (前書き)

便利なチート能力あるなら活用しないと！ でもやりすぎるとつま
んない！ しかし当人にとっちゃ知ったことか！

………すみません、こっぴなっちゃいました。

No.003 「転がる先の…」

さて、船長の好意とボクの財布から減った20万ジエニーによって上等な個室を使わせてもらえることになり、ゴン、クラピカ、レオリオにボクの四人はその部屋に集合した。

あの後、ゴンが舵取りを仕込まれている間に、ぼとぼとの濡れ鼠だった二人は髪を拭き、服を着替えている。

ちなみにボクが着替えの必要のない状態だったのも二人の期待と関心を買ってしまった要因となっているようだ。

でもシャワー借りちゃったけどね。汗かいちゃったし。服屋で揃えた下着とブラウスだけ交換し、先ほどまでと同じように良家の子女ルックでかためる。

改めて着替え終わった二人に会うと、レオリオの目線がボクの胸やら腰やら尻を上下してるのがわかる。

さっきはしてなかったのに……あ、やめた。うーん、さっきまでは緊張しててボクのプロポジションとかに気付かなかったとか？ まあ、年齢的に守備範囲外っぽいから、改めてチェックされただけかもしれない。

荷物からサンドイッチと缶コーヒーを人数分取り出して渡し、ゴンがまだだからと我慢してもらって昼食で時間を潰すことにする。食べ終わる頃にはゴンが戻ってきたので、ゴンにも昼食を渡してすぐに船長さんと交渉し、個室を借りたわけです。

「ねえねえ、そろそろ教えてよ！」

好奇心旺盛で大変結構。レオリオは勿論、クラピカも興味津々である。

「その前にまず、これからボクたちが受けるハンター試験について
マル秘情報を教えますね。これは避けては通れない話ですので」

ボクの言葉に三人の顔に興味だけでなく真剣さが混じる。そりゃ
そうだろう。

三人ともルーキーとはいえこれから受験するのだ。話半分でも謹
聴せざるを得ないのだ。

「まず、一般に公開され、ボクたちが受験するのはあくまで「表」
の試験です。これでようやく半人前というところですね。表試験に
受かったら、次に裏試験と呼ばれるものに合格して初めて一人前の
プロハンターと名乗れます。そして表試験の合格者には裏試験につ
いての情報が一切開示されません。ですので、表試験に合格したか
らといって、すぐにプロとして活動できるわけではないんですね」

「へえー、そうなんだっ」

『……………』

ゴンがフツーに感心する傍ら、二人は啞然、とまではいかないが、
一般人には完全に秘匿されている情報を初めて聞き、それなり驚い
ているようだ。

ボクは間を持たせるために、ストックの缶コーヒーに口を付ける。
飲み干して缶を置くタイミングを見計らい、クラピカが質問を投げ
かける。

「今ここでそれを話すと言うことは、君の不可思議な力はその裏試
験に関わる、ないし類するものと考えていいだろうか？」

「その通りです。この裏試験の内容はただ一つ、念法の修得です。念法とは俗に念能力と呼ばれるもので、生命エネルギー“オーラ”を自在に操る技能の総称です。ハンターは強さが必須条件の職業ですから、念能力によって戦闘能力を向上させるのは最低限の義務となっています。まあ、表試験合格後、人格的にもOKの出た者に心源流の師範代がレクチャーするのがお決まりの流れらしいですよ」

「戦闘能力の向上、つまりは先ほどシェリーが見せた巨大な腕のようなものを私たちも身に付け、攻撃に使えるということだろうか？」

「当たらずとも遠からず、ですね。アレはあくまで私だけの能力ですから。似たようなこともやろうと思えばできなくもないですが、各々の資質にあった固有の能力を開発することをお勧めします。怪我を治したのも私だけの特殊な能力ですし」

「！　じゃあっ、その念能力とやらを修得してもシェリーみたいに人を治すことはできないってのかわっ！？」

眼光に熱意を秘めたレオリオの視線にドキリとした。……………驚いただけさ。うん。なんだよ、ドキリって……………。

レオリオは、話が違っぞ、と言わんばかりにずい、と詰め寄る。いや、ちゃんと教えるから落ち着いてほしい。ボクは手を掲げてレオリオを宥め、さらに説明を続けた。

「先に答えますと、できます。念能力というものは才能に左右されませんが、かなり融通の利く技術ですので、それこそ不治の病と現代医療が匙を投げた患者を完治させることも、手で触れただけで死に体の重傷者を即座に完治させる治癒能力を得ることも、決して不可能ではありません。極めれば失った欠損部位ですら復元できます」

「んなっ！？ そりゃあ本当かつ！！？」

「はい、可能性はゼロじゃありませんから。でも、結局はレオリオの努力次第ですよ？」

挑発じみたセリフ。しかし、レオリオはそれを挑発と理解しつつも、己を奮起させてボクに己の意志を全力でぶつけてきた。

「へっ、言ってくれるな。俺の夢はどんな怪我也病気も治せて、貧乏人からは絶対に金を受け取らねってかつこつけた医者になることだ。この夢のためなら、幾らだって努力してやらあっ！」

「うわあーっ！ レオリオの夢ってすごいね。オレ、絶対に応援するよー！」

「レオリオ、重ねて非礼を詫びよう。私もお前の夢を応援させてほしい」

熱意はボクだけでなくゴンとクラピカにも伝わったようだ。

レオリオは自分の口走ったセリフへの素直なリアクションに少し赤面し、わざとらしく咳払いする。

うん、前世の世界だったら黒歴史確定な場面だけど、キャスティングが彼等だとしても微笑ましく映る。ハンター世界のオアシスですな。

その後、レオリオが落ち着いたタイミングで、ボクはクラピカに向けて言った。

「もちろん人を治す力を得ることもできれば、人を殺める力として得ることもできます。クラピカの仇である幻影旅団は団員の全てが

一流の念能力者という情報で」

「その話を詳しく教えてくれっ！」

「痛うっ!?!」

今度はクラピカに肩を掴まれた。それもかなり強く。【纏】を除いていたから、肉体の防御力は外見相応しかないボクの肩が、ミシミシと嫌な音を立てている。

涙目でクラピカの顔を覗くと、彼の瞳は真紅染まっていた。いや、これこそが世界七代美色である緋色なのか。

その希少な緋の眼に鋭く凝視されてしまい、ボクは正直怯えてしまっていた。

クラピカの執念は原作を通して知っていたが、その憤然とした内面をまざまざと見せ付けられ、この世界がどうしようもなく現実なんだとようやく実感したらしい。震えを抑えることができなかった。

「おいクラピカっ、落ち付けっ！ シェリーが脅えてるだろうが……っマジで目の色変わってるっ!?!」

「そうだよ。痛がってるよっ!?!……っうわぁ、ホントだっ!?!」

「!?! す、すまないシェリー………連中についての情報を聞いて、頭に血が上ってしまった……こんな振る舞いは二度としないと誓う。許してくれ……」

「あ……はい、謝罪は受け入れます。だから、そう気を落とさないで下さい」

復讐者へと豹変したクラピカに三人揃って驚愕したが、今はどん

よりと気落ちした彼を必死に宥める。

ああ、本当にビックリした。そして陰鬱なまでに落ち込んだクラピカに緋の眼のことも聞かず、励ますゴンとレオリオはすでに莫逆の友って感じですね。

暫くして平常ラインまで精神状態が回復したクラピカがぽつりぽつりと言葉を漏らす。

「緋の眼。これがクルタ族の狙われた理由だ」

そうして語られるのは、緋の眼によって起こった悲劇。己以外の部族を根絶やしにされた孤児の慟哭だった。

奪われた者の嘆き、奪われた者にしか理解できない傷痕の深さ、ボクには到底推し量り切れない哀しい感情だった。

「私は、全ての仲間の眼を絶対に取り戻す。そして、彼等の命を奪った幻影旅団を一人残らず滅ぼしてやる。そう、誓ったんだ……」

凄味を秘めた頑なな決意。

ボクたち、ゴンやレオリオも含めて下手なことは一切言えなかった。だから、話そう。ボクが知る幻影旅団のことを。

「私が知っているのは、今は失われた未来を記した書物によって得た知識です。その中に幻影旅団についての記述には、クラピカが知りたい様々な連中の情報が載ってました」

「……………そういえば君はゴーストハンターだったな。他の者から聞けば眉唾な話だが、そのような疑わしい書物の存在も君の力を見た後でなら、信じないわけにはいかないが……………」

クラピカは静かにボクの眼を見据える。彼の心眼はボクに一切の

虚偽を許さないだろう。まだ《演》の文珠の霊力を使い切っていないので、これが最後と使い切った。

「嘘はついてない。そう私は確信する。だからシエリー、その書物の内容を私に教えてもらえないだろうか、頼む」

な、なんとかバレなかった！！ でも文珠は力を使い果たして消滅してしまった。あ、危なかった……。

「いいですよ。なら、念についての知識を伝えるついでに、旅団の情報も伝えますね」

ボクが前に出した右手。漆黒の手袋に覆われた掌が淡く輝く。拳大の光は徐々に縮まっていき、不定形から次第に真球に形を整えていく。やがてビー玉ほどのサイズになったそれは、翠色に輝く一個の宝玉となっていた。

三人はどう見てもファンタジーな光景に三者三様の感情を浮かべて、静かにボクの言葉を待つ。

「文珠と言います。これで三人の精神に直接ボクの知識を写します。今からするのは、三人がボクを信じてくれて、ボクがそれを裏切らず、信用と信頼に応えるのが前提でようやく行うことができる行為なんです。もし念について適切な知識がある人間なら、まず間違いなく警戒に値する行為ですね。三人は、ボクを信じてくれますか？」

ボクが生成したばかりの文珠に込めた文字は《伝》。任意の情報を直接三人の頭の中に投写する所業である。

傍目から見たら、操作系能力に類することだよな。文字を変えれば洗脳だって容易だし。応用範囲が広すぎて困る能力だなあ……。

「オレはシエリーを信じるよ」

「ああ、俺もだ。っていつかこれから師事しようってんだ。信じるに決まってるんだろ」

「私もだ。それに目を見ればおおよそはわかる。君が私たちに危害を加えるつもりのないことぐらい」

「ありがとうございます。では、いきますよ」

そうしてボクは《伝》の文珠を発動させた。そして彼等に伝える。燃える方のネンも忘れずに、念の知識を。

【纏】【絶】【錬】の基本技から、それらを応用する【凝】【隠】【周】【堅】【円】【硬】【流】は勿論のこと、固有能力である【発】についても。

まあ、【発】に関してはかなりぼかして、能力の例を幾つも混ぜただけだね。ハンター協会会長のネテロの百式観音を始めたとした様々な能力を。

まあ、中には二次創作で見かけた能力のパクリとか、前世で妄想したオリジナル能力とかもいっぱい混ぜてるけど、別にいいよね！ 幻影旅団の方も、メンバー全員のイラストタッチな似顔絵と一緒に「見せ技」として目撃情報のある団員の能力って書物の記述としてでっち上げて、ちらほら情報の中に放り込んでおきました。

ふう、良い仕事した（汗）。いやあ、だって、ねえ？ せっかく文珠あるんだから、口で説明するよりの確且つ簡単に情報伝達できるじゃない？

他の二次創作みたいに、知った風なクチで説明するのそろそろ疲れてきたんだもん。もう勘弁して下さい。だから手抜きしたっていいじゃない！

ちなみに公式読本『ハンターズガイド』の説明をほとんどパクっただけです。原作の説明を引用するとネタバレになるし死亡フラグっぽかったので。

「へえー、念ってすごいんだ。オレも習いたいな！」

ゴンはただ素直に感心していた。原作でもゼパイルが言及してたけど、ゴンって内容を純粹に評価するんだよね。こんな子がカメラアント編では『ゴンさん』になるのか……………魔改造ゴンにはフツ―にあのレベルになってもらわないといけないね。「精神と時の部屋もどき」で頑張ってもらおう。

「強化系の治癒能力か。絶対にものにしてやるぜっ」

レオリオは思いがけず異なる方面での夢への足がかりを手にして、意気込みを新たにする。彼を見ると、「医は仁術なり」って言葉が素直に思い浮かぶね。

レオリオにも修業頑張ってもらわないとね。「精神と時の部屋もどき」なら受験勉強の時間も稼げるし、ヨークシン編まで魔改造ですよー。

「どうやら私は勘違いしていたようだ。まだまだ未熟……………いや、旅団に復讐どころか未だ足下にも及ばない場所にいたということか」

クラピカは一人だけ悲愴感を滲ませつつも、今得た知識と旅団の情報から対抗するための力を模索していた。

うーん、クラピカだけ暗い。暗いんだけど修正可能、なのかな？ 少なくとも即死レベルの制約と誓約なんて命懸けの能力は阻止しない。

まあ、いざとなったら復讐も手伝うことになるのかな？ サポー

ト要員としてなら参加もやぶさかじゃないんだけど。少なくとも原作みたいに半年程度じゃ正攻法で旅団に対抗できないし、やっぱり修業時間で追いつくしかないね。

この後、ボクは三人の精孔を無理矢理に開き、【纏】を覚えてもらった。

覚えた順は予想通りゴン、クラピカ、レオリオの順だった。でも三人とも一分かかってないんだよね。ナニソレ。レオリオとかちょっと意外なだけど？

……………結局、ザバン市に入る前に宿泊したモーターで、加速空間を使って修業したんだけど、ハンター試験前に【発】抜きで【凝】まで覚えちゃったよ、この三人…………。

ええ、ハイ、水見式もやりましたよ。ゴンは水見式自体を楽しんで、レオリオは強化系と相性の良い放出系にガッツポーズを取り、クラピカは無表情で拗ねた。

しょうがないから文珠で調べるって嘘ついて、緋の眼が発現してる間は特質系だって教えたら、下降したモチベーションを取り戻す。

あー、キルアとかどうしょ…………。

No.003 「転がる先の…」 (後書き)

フツーにキンクリ。期待した方はすいません。

No.004 「孤猫との出会い」(前書き)

考えて見てほしい。

エレベーターが動いてから、ハンターの職業をレクチャーする時間
(食事時間)があつたことを。

どれだけ深いんだよ！

エレベーターが遅いのか!? 漫画やアニメを見た感じ、Gの違和感を受けてるようには見えなかつたからもしかしたら本当に遅いか
もしれないけど、ツッコミを入れずにはおれないです。

No.004 「孤猫との出会い」

「ステーキ定食」

「……焼き方は？」

「弱火でじっくり」

「お客さん奥の部屋どうぞー」

店長と思しきおやじさんの質問に人差し指を立てて焼き方を告げるナビの凶狸狐（父）さん。

そうしてボクたち四人は奥の部屋へと入るべく、ドアを開ける。うん、どう見てもファミリー向けの焼き肉店の内観です。

店員のお姉さんがテキパキと食材とご飯を準備し終わると、熱した鉄板の上にステーキ肉を置いてすぐさま出て行った。ナビの狐パパもそれに続く。

そして閉めかけるドアの向こうで振り向くと、

「一万人に一人」

『？』

「ここにたどり着くまでの倍率さ。お前たち新人にしちゃ出来た。それじゃあ頑張りな、ルーキーさん達。お前らなら来年も案内してやるぜ」

ボクたちの出会いは一期一会ながら、彼は来年の再会を楽しみにそう言って部屋を出て行く。

そしてカチツと極めて機械的な音が聞こえると同時に、ボク達がいる部屋型のエレベーターが下降を開始した。

「まったく失礼な奴だぜ。まるで俺達が今年を受からねーみたいじゃねーか」

レオリオの言葉にすかさずクラピカが答える。

「三年に一人」

「ん？」

レオリオは愚痴に同意が返ってくると思っていたのを裏切られ、クラピカの言葉に耳を傾ける。

ゴンはモキュモキュとあっという間にレアに焼けたステーキ肉を頬張っていた。

「ルーキーが合格する確率だそうだ。新人の中には余りに過酷なテストに途中で精神をやられてしまう者、ベテラン受験者のつぶしによって二度とテストを受けられない体になってしまった者などざららしい」

その話に、レオリオとクラピカはわずかな不安を覚えた様子だったが、ボクはゴンに負けじと食事に精を出している。こう見えて健啖家なのです。

「んー、シエリーやクラピカの話じゃハンター証がすごいってのは判ったけど、何でみんなはそんな大変な目にあってまでハンターになりたいのかなあ？」

そういえばゴンってハンターの職業については全く知らないんだっけ。これを無知と取るのは酷なのかな？ 事前調査ぐらいしときなさいって思わなくもないけど、まあクラピカとレオリオが言うからボクは何も言わないけど。

「お前本当に何も知らねーでテスト受けに来たのか!？」

「うっ……」

凶星を指され、ゴンがフォークを銜えたまま、ちよつと仰け反る。それにやれやれと二人は溜息を吐き、己の持論をゴンに浴びせた。

「ハンターはこの世で最も気高い仕事なのだよ!！」

「ハンターはこの世で最も儲かる仕事なんだぜ!！」

そこからは、二人の人間性に基づいたハンターという職業の豆知識が披露される。

まあ二人ともゴンに教えることだから、自分の嗜好に沿った知識をゴンにレクチャーしようって感じなんだろうね。

しかし「金の亡者め」、「ええかつこしいが」って遣り取りがとも気軽なノリで応酬される。

これは事前に一次試験途中で互いに教え合う二人の理由をすでに知り合っているがゆえの気の置けない距離の賜物なんだろうな。

まあ、それはさておき、

「どうだ！ ゴン、シエリー!！」

「二人はいつたいどちらのハンターを目指すんだ!？」

「どっちって言われてもなあ」

「適度に自分のルールを守れて、それなりにお金が稼げればいいんじゃないでしょうか？ ゴンの場合、ハンターになるというのは純粹にお父様を追いかける行為ですし、ハンターとして何がしたいかというのは、今決めなければならぬことではありませんから」

フウハハハ。こういう時は日和見主義な意見でその場を濁すに限る！ どっちも意見も一長一短だからねえ！。

仮にクラピカの言うような正統派ハンター路線だと、変な柵がいっぱい付きそうだし、レオリオみたいに金銭を得るのが目的でブイ言わせるのも人としてどうよって感じ？

ま、この世界じゃ武力と金による権力の二つはあって困るものじゃないし、ツエズゲラみたいに懸賞金ハンターでも功績残せちゃうような猛者もいるわけだし、金に執着するのも悪いことじゃないんだけど。

正統派路線でも実績を上げれば金なんて後から付いてくるのかな？

この世界の法律とかほとんど知らないから騙されて素寒貧になったり、破滅する可能性もなきにしも非ずと予想しちゃうんだけど。

どのみち、キメラアント編を考えたら、正規の活動は二年はお預けっぱいから、今結論を出す必要ないよね。

「うん。そうだね。取り敢えず今は試験を頑張るよ」

「そうだな。意見を押し付けて済まなかった」

「俺もだ。悪かったな」

「あはは、男の子はそれぐらいが丁度良いんですよ」

と言ってる内に下降が終わったらしい。ボクは食器を片付け、残

った料理をタッパーに詰める。

よく考えたらクラピカもレオリオもなんだかんだでけっこう食べてるのね。ボクはもうお腹いっぱいだっていうのに……。くそっ、あとで食べよう。

そここうしてる間に会場へと通じるドアが開ききったので、ボクたちはドアから出た。

『！』

既に到着していた数多の参加者の視線がボクと三人に集中した。暫くの間、不特定多数の値踏みするような視線に晒されていると、波が引くように視線が外れていく。

しかしボクたちは誰一人気圧されない。なんせ、調子に乗って加速空間で一ヶ月間も念と燃の修業をしたんだから。

まだまだ初心者で粗いながらも、全員が【纏】を維持し続けている。気当たりなんて屁の河童ですよ！

…………… まあ、ボクとレオリオは原作の一次試験対策のために基礎体力、特に持久力を上げるべく努めたんだけどね。

ボクの場合はYOKOSHIMAスペックの恩恵で、人狼と散歩できる体力持つてるって言うっても、この世界では「まあまあ」レベルの体力らしい。少なくとも、試しに持久走をしたらゴンとクラピカに大差を付けられてしまった。

ま、まだまだ！ これから鍛えるんだからさ！

「うす暗い所だな」

「地下道みたいだね。一帯何人くらいいるんだろっね」

「君たちで405人目だよ」

四人で辺りを見回していると、壁に設置されてるホースの上に腰掛ける小太りな小男がゴンの疑問に答えた。
出たよ、お約束の新人漬しのトンパが。

「オレはトンパ。よろしく」

胡散臭い糸目の笑顔で近づき、ゴンと握手をしようとする。ボクはそれを許さず、ゴンを両手で抱き抱えて、トンパからさつと距離を置いた。

『……………』

沈黙が流れたけどボクは悪いことをしてない。うん、してないのだ。

「シェリー、それは流石にどうかと……………」

「ボクがした事前調査によると、目の前のこの人は新人漬しの二つ名で有名な受験者です。自分が合格することを目指さず、スリルを味わう娯楽として試験に参加するサディスト。他者の心を折ることに悦びを見出し、特にルーキーにトラウマを作ること何よりの楽しみとしているとゆう、お世辞にも褒められた人種ではありません。握手するだけでどんな仕掛けを繰り出してくるか」

素直なゴンと違い、クラピカとレオリオはボクの言葉に警戒するように、トンパから距離を置く。

トンパはボクみたいな小娘にいきなり自分の参加理由まで暴露され、作り笑いを呆気なく崩していた。

本性を表したその顔は苦虫を噛み潰したような醜いもので、舌打

ちしてボクたちに何かを言おうとする。
しかし、ボクはそれも許さない。

「ほげえ　っ！！？」

何をしたかつて？　大したことはしてないさ。不思議なことにボクのパンプスの爪先が、奇声をあげたトンパの……うん、ボクにも前世で激痛の憶えがある例の場所に突き刺さっているのだ。

泡を吹いて倒れるトンパを無視し、豚の悲鳴によって集めた注目から逃れるように、ボクたちはマメーンさんから番号札を受け取ると、さつさとその場から離れる。

三人は若干青い顔をしていたが、トンパに同情はしていないようだ。

「シェリーよく知ってたね」

「あの人、電腦ページで調べるとわりと簡単に知ることが出来ますよ」

これは本当。転生（仮）初日、ついでに調べたらあっさり情報を手にすることができてしまった。

コイツに素で引つかかるってよっぽどのバカでしょ。ニコルっておぼっちゃまクンもモバイルで簡単に調べてたし。

「受験する以上、ハンター試験に関連する情報は傾向と対策も含めて調べておかないと本番で怖いですしね」

まあ、こういうやり方に囚われると、本番で意表を突いた展開に陥った時にあっさり思考停止になっちゃうので、ゴンみたくにろくに調べもせずに受けるのもありっちゃありなんだけどね。

ボクの発言にゴンだけでなくレオリオまでちよつと乾いた笑いを浮かべる。クラピカはその通りだと言わんばかりに肯いていた。そう言えば原作でも一人だけジュースに警戒してたっけ。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリッ……！！

そんな遣り取りをしてると、あの不気味なタイマーによって試験開始時刻を知らされる。

音源を辿るとその先には、壁面の小穴の前、トンパ同様に大型ホースの上に佇む髭紳士サトツさんがいた。

「ただ今をもって、受け付け時間を終了いたします。では、これよりハンター試験を開始いたします。

こちらへどうぞ」

サトツさんがふわりと着地し、ホテルのボーイのような仕草でボクたちを誘導する。

その後、ハンター試験について参加の是非を問う最後通告がなされ、ボクたち受験者一同はサトツさんの後を追う。

「当たり前の話だが誰一人帰らねーな。ちよつとだけ期待したんだがな」

レオリオが間の抜けたことを漏らす。いやいや、それは流石にないでしょ。

「……………」

「おかしいな」

「そうですね」

ゴンとクラピカが違和感に気付く。きっと足音の歩調が早くなつたのに気付いたんだろう。

レオリオも違和感に気付き、キョロキョロと周囲を見回す。

「おいおい、何だ？ やけにみんな急いでねーか？」

「やはり進むペースが段々速くなっている！」

「前の方が走り出したんだよー！」

わーい。マラソン大会の始まりだあ……。後ろの方だから、これからずっと汗臭そうだなあ。

「申し遅れましたが、私、一次試験担当官のサトツと申します。これより皆様を二次試験会場へ案内いたします」

「二次……？ ってことは一次は？」

「もう始まっているのでございます」

あ、今のハンゾーだ。マジでハゲだよあの人……恰好もちょっと忍者っぽいし、全然忍んでねええええー！！

「二次試験会場まで私について来ること。これが一次試験でございます」

ます。

場所や到着時刻は答えできません。ただ私について来ていただきます」

「なるほどな……」

「変なテストだね」

「さしずめ持久力試験ってどこか。望むところだぜ。シエリーのおかげで体力もついたし【纏】だってあー　ぶるぺっ！」

思わずレオリオの後頭部にチョップをしちゃった。ってかね、こんな場所でそういうことを言わない！

おクチにチャックのジェスチャーで、それを無理矢理に伝える。理解したレオリオは目線で謝ってくる。うむ、素直でよらしい。

距離や時間でゴールが教えられないのは心理的負担になるだろうけど、三人はこの程度では決して折れないし、ボクはカンニングで知ってるから全く気負ってません。

あ、軽快な音が聞こえる。ということとは。

ボクたちの横を、スケボーに乗ったゴンと同年代の子供が追い抜いていく。

レオリオは原作通りにその子供　キルアに突つかかる。念能力者Lv.1から3ぐらいになったっていうのに、やっぱり突っ込むのね。ちよつと大人げないぜ……。

「おいガキ汚ねーぞ！　そりゃ反則じゃねーか、オイ！！」

「何で？」

心の狭い大人の難癖にキルアが「何言ってるんのコイツ?」って顔で訊ねる。うん、そうなるよね。

「何でっっておま……こりゃ持久力のテストなんだぞ!」

「違うよ。試験管はついて来いって言ったただけだもんね」

「ゴン!! てめ、どっちの味方だ!?!」

「怒鳴るな。体力を消耗するぞ。何よりもまずうるさい。テストは原則として持ち込み自由なのだよ!」

「全く持ってその通りですよね」

「そうそう。オレは駄目でそのお姉さんはいいの?」

「あん……?」

『ってシェリーは何に乗ってるんだよ!?!』

O.H。三人から同時に突っ込み食らった。

何で突っ込まれたかって? うん、それはね、ボクが自転車（折り畳み式）に乗ってるからさ。

「いえ、走るより楽なので」

「おまえそんなもんどこに持ってたんだよ!?!」

「ははははは、荷物の中に決まってるじゃないですか」

ボクのキャリアケースは《収》《納》の文珠によって四次元バッグと化してるからね。ハンター試験に必要な道具やら水やら携帯食糧やら、ぎっしりと詰まってる。

レオリオはまだガウガウ言ってるけど、ゴンとクラピカはボクのことだから、とフツーに納得していた。うん、それはそれでボク悲しいよ……。

「ねエ君、年いくつ？」

「もうすぐ12歳！」

「……ふーん。やっぱりオレも走ろつと」

流れるような動作でスケボーを蹴り、地面の反動で浮かんだそれを片手でキャッチする。

「おっ。かっこいいっ」

「オレ、キルア」

「オレはゴン！」

同年代の参加者に、キルアはシニカルな笑みを浮かべ、ゴンも笑顔でそれに応える。

そしてキルアの視線がレオリオに移った。そして悲（喜）劇が始まった。

「オッサンの名前は？」

「オッサ……これでもお前らと同じ十代なんだぞ、オレはよー!!」

「ウソオツ!!?」

「あ　　!!　　ゴンまで……!!　　ひっでー、もオ絶好な!!」

「……………」

「……………」

ボクとクラピカは、【絶】で静かに三人から離れた。

No.004 「孤猫との出会い」(後書き)

ちなみに、組み立て式のバイクにしなかっただけオリ主も自重しました。

No.005 「何度目かのブレイク行為」(前書き)

ヨークシン編、グリードアイランド編、キメラアント編のために、オリ主はできる内からいろいろやるうと模索してます。

しかし彼を進んで仲間にするオリ主ってコイツだけなんじゃないだろうか……。文珠なけりゃ絶対にしなかつただらうけど。

No.005 「何回目かのブレイク行為」

Side:ニコル

バカな!! バカな……!! バカな……!! バカなあああ
あっ!!

オレが脱落……!? そんなバカな!! オレにかなう奴なんて
一人もいなかった! 勉強も!! スポーツも!! 芸術も!!
全てがトップだったんだ!!

オレ以外の人間なんてただのクズ!! オレに利用されて捨てら
れていくだけのガラクタだったはず!!

なのになんだ? オレは夢を見てるのか? オレがビリだって?
ドベだつて?

いやだ!! 信じない!! あり得ない!! 絶対に認めない!
!! ちくしょう! 畜生! チクショウ!!

オレが落第生!? 脱落者!? 負け犬!? 落伍者!? 落ち
こぼれ!? 愚か者!? 負け犬(笑)!? バカ!?

い、イヤだ!! いやだ!! いやだああ!!

「いや……ヒョッ……ゼヒッ……たくない……ゼハッ……ヒュッ……
ゼゼッ……」

Side Out

ボクはちよつとした目論みのために最後尾を自転車で走り続けて
いると、最初の脱落者であるニコルが汗まみれな上、涙と洩と涎を

駄々洩れ状態で、ふらつきながらも懸命に走っていた。

どうせ安物なので自転車を放棄し、彼が落としたモバイルをキャッチする。けっこう良さそうだし、壊れるのは勿体ないよね。彼の心身も含めて。

そうそう、ボクのせいでトンパが失格になったから、例の三人組がニコルにちよっかいを出す気配もなく、さっさと前の方へと走って行ってしまった。

うーん、彼らがニコルを完膚無きまでに潰してからの方が確実にったんだけど、あとトンパを合法的に潰すのって詐欺師の罫の霧の中か、四次試験だったからしょうがないか。

ボクは暫くニコルに併走していたが、やがては力尽き、崩れ落ちた彼の前で止まる。

今からボクがやるのは他人の弱みにつけ込む最低最悪な行為である。しかし考えてみてほしい、肉体的にも精神的にも追い詰められた人間に誘導を施すのは、軍隊では極々当たり前の教練方法なのだ。ハンター試験の裏表合格を手助けするなんて、相応の対価にならないだろうか？ 念のため《導》の文珠をニコルに使用し、ボクは悪魔の誘いを紡いだ。

「ニコルさんでしたっけ？ 随分頑張っていましたけど、もうギブアップですか？」

「…………カヒユツ…………ゼツ……………………ゼヒツ…………ヒユツ……………………ゼヒヨツ……………」

「ねえニコルさん、ボクが力を貸せば、あなたはもしかしたら最終試験すらも合格できるかもしれませんよ？」

文珠の効果によって、ニコルはなけなしの体力を総動員して顔を

上げ、ボクと目を合わせる。

「あなたはこの試験で、世界の広さを思い知りました。今のあなたより優れた人間なんて、それこそ掃いて捨てるほどいます。さらに、この程度の試験をあつさり合格する人間も、探せば世に五万といえるのが現実です。さて、それを踏まえて、あなたはリタイヤしますか？　今まで狭い世界で培った鼻っ柱が折れただけで、本当に諦めますか？　ボクたちと一緒に、初受験で合格したくはありませんか？」

ボクはいつもの文字を込めた文珠で、ニコルへ念に関するあらゆる知識と、いかにこの世界の上位陣が化け物なのかよくわかるイメージを伝えた。

あ、目の色が変わった。文字通り、このハンタ世界の理不尽さを知ってしまったのだ。この程度で限界を迎えてしまう程度に常識的な人間である彼が絶望してしまっても、まあ仕方ないことだろう。それでもいろいろと自分に折り合いを付ければ、何とか納得できるのもまた現実だけだ。

それにまあ、彼には世の「可能性」というものも同時に見せつけたのだ。これで折れるならそれまでだろう。

「ボクと一緒に来ませんか？　もし来るのなら、今とは比較にならない領域にまで連れて行けますよ。それに少なくとも、このまま失格になるよりは面白い人生を約束します。

あ、断ったらボクに関わるあらゆる記憶を消させてもらいますので。ご存知の通り、念は秘匿技術ですから」

それでもって、断るようなら《忘》の文珠を使わせてもらおう。

加速空間でおよそ一ヶ月、90個弱もの文珠を生成して、修業空間の維持、レオリオとクラピカの修業時のみに限定した不老処置、そしてジャンプ系バトル漫画式の修業自体で、結局は70個以上使

つたとはいえ、ハンター試験期間中も生成し続けているので、文珠には余裕がある。

「返事は瞬きで結構です。一回でYES。二回でNO。返答は如何に？」

そして彼が選択したのは、ボクの間（下僕）になることだった。

さーて、魔改造！ あ、そーれ魔改造！

まず文珠を三つ取り出し《超》《回》《復》の文字を込めて使った。いい具合に肉体の限界っぽいし、妥当だろう。

文珠によつてダメージを受けた筋肉と、肉体の様々な細胞が、身体を強くするために作り替える。

再生と細胞分裂が行われ、彼の身体を覆う脂肪が燃烧し、発生した熱量が湯気となって立ち上る。うわ、汗くさー！！

ボクは慌てて飛び退き、さらに《癒》の文珠で体力を回復させ、《覚》と《得》の文珠で無理矢理に【纏】を修得させる。

五分ほど経った頃には、サイズが合わずぶかぶかで、それでいて丈の足りない服を着る美少年にジョブチェンジしたニコルが現れる。えーと、例えるなら『幽遊白書』の蔵馬の義理の弟？ 凡庸だけど整った優しげな顔立ち、身長も伸びて今やクラピカ以上の中肉中背となっている。

ニコルは己の身体を覆うオーラと、変生した肉体の調子を確認めるようにボディチェックを繰り返す。

「これが念……なんて素晴らしい。お嬢さん、ありがとございませす！ オレ、あなたのおかげで生まれ変わりました！！」

ニコルが伸びた身長を折り曲げ、深々と頭を下げ、感謝の意を表す。

いや、君の言う通り、マジで生まれ変わったよね。文字通り種族が転生してるんでない？ もしくは擬人化。例えるなら、ヒトヒトの実を食べたカエル人間的な感じで。

「シェリーと呼んで下さい。では行きましようか。身体を馴らす感じで付いて来て下さい」

「はいっ！」

取り敢えず本音を徹底してひた隠すボクは、彼の商売道具？ のモバイルを渡し、彼と一緒に先ほどまでとは比較にならない速度で地下道を疾駆する。

よし、これで完全バックアップ要員、ゲットだぜ。

「読み合い？ 心理戦？ 駆け引き？ そんな取引じみた遣り取りなんて、この場で必要ありません。必要なのは、絶る弱者への藁と餌ですよ。」

適度なペースで階段を昇っていき、シャッターの閉まる直前に地上へ出る。

その後は原作通り、偽試験官騒ぎをヒソカが虐殺で収め……収めたのか？ 一次試験後半戦が開始された。

ニコルと適当に最後尾を走ってるんだけど、サトツさんってマジ外道だと思わずにおれない。この森に棲息する動植物にどんだけ人間が捕食されるのやら。

作風的にモブキャラはティッシュスーパーよりも軽い命なのは知ってるんだけど、これだけ人死に出てる中、マラソンするのってかなり憂鬱なんだよねえ……。

ボクは霧で視界不良なのを良いことに、ハンズオブグロリーで襲い来る動植物を薙ぎ払っていく。この分だと、今日創れる文珠が一個減るかな。

でも霊力じゃなくオーラを使用するとスタミナがねえ。現状、ゴンたちの方がオーラの総量が多いんだよね。あと顕在オーラも。

霊能力と念能力のハイブリッドな仕様で何とかついて行ってる感じ。

ボクは後に声をかける。

「ニコル、そちらは大丈夫ですか？」

「ええ。この森の生態系については一通りの知識を持ち合わせています。それにシェリーさんについて行ってるだけなので、さほど疲れてもいません」

コイツ、性格と体力を除いたらホント拾いものだったのね。クラピカに匹敵する情報収集能力じゃないか？ あとはそれを活かす分析能力だけど、そっちも期待しちゃっていいかな。

なんて思っていると、

「レオリオ

！！ クラピカ

！！ シェリー

！！ キルアが前に来た方がいいってさ

！！」

「この霧と人数じゃちつと無理だ

！！」

「そこを何とかがんばってきなよ

！！」

「うわーお。あんな大声で名前呼ばれちゃったよ。緊張感のない掛け合いに、さらに恥ずかしくなってくるじゃないか。」

隣に移動して走るニコルがクスリと笑う。コイツ、さっきまで精神的に断末魔な状況だったのに余裕ありやがるな……。

「頼もしい仲間ですね」

「ええ。二次試験会場に着いたら紹介しますよ」

皮肉と取れるが素直な感想に、苦笑しつつ答える。

「と言っても、このままじゃ不味いな。原作通りならヒソカが試験官ごっこをするはずだし。」

まあ、三人の【纏】のレベルなら覚えたてつてのは一目瞭然だし、交戦してもヒソカ自身は欲求不満の解消とはいえ本気で試験官としてハンターの素質を見定めたのだ。みんななら青い果実判定は間違いないだろう。だから心配はいらない。

けど……問題はボクとニコルだなあ。

YOKOSHIMAスペックなら、才能って面でも素ン晴らしいわけで、解析結果からゴンレベルじゃないけど、クラピカに勝つレベルの念の才能はあるんだよね。

さて、そこでネックなのがスカウトしたばかりのニコルである。彼は、うん、お世辞にも才能があるとは言えない。比較対象が間違ってるだけで、彼も一般人よりは才能があるんだろうけど（具体的にはズシくらい？）、それでもヒソカの合格ラインに達しているかというと、激しくビミョーだった。

しょうがない……。ボクは試験官ごっこで三人とは別行動を取ることに決めた。

ヒソカがゴンたちを見逃し、三人が生き残るという原作知識を盲信するのはしっぺ返し食らいそうなので、保険は掛けておくけど。

念のため、三人には《召》の文珠をもたせてるから、いざとなつたら手元の《喚》の文字で召喚できる。あとは《感》の文字で三人の生命反応に注意しておけば、何とかなるだろう。もし即死でも、すぐなら《甦》か《蘇》で呼び戻せる、はず……。
そうしてボクは、レオリオの悲鳴を聞いた瞬間に、ニコルを掴んで《転》《移》の文珠を発動した。

「！？」

突然背後に生まれた気配にキルアが飛び退き、即座に臨戦態勢に移る。うん、キルアをイメージして瞬間移動しました。

ニコルはニコルで不思議体験アンビリバーボーなんだけど、放出系の空間跳躍能力の知識も与えてるせいかな、過度に驚くということはない。

フウハハハ、これでヒソカに直で接触する事態を先送りにし、先頭集団の座をキープだ！

え？ 薄情？ いや、うん、でもさー……せつかくスカウトした仲間（下僕）をあつさり殺されたら、幾らちよつとした外道のボクでも罪悪感湧くよ。ホントなら脱落で済んでたわけだし。

ゴンたちなら大丈夫！ きつと！

むしろヒソカの変態性を信頼し、三人の才能を見抜いてくれると確信する。というか、ぶつちやけヒソカとは関わりたくないのが本音なんだけど……。あー、やっぱり時間の問題かな。

四次試験じゃニアミスしそうだし、この後はどうしようかなあ。
ヨークシン編で旅団ごと一網打尽に葬り去るのが無難かもかも。

「お前シエリー！？ どんから湧いて出たんだよっ！？」

「人をボウフラみたいに……。ちよつと気配を消して追いついてき

ただですよ」

嘘っぱちだけど、その場で【絶】をすると、目の前にいるのに存在感の薄れたボクに驚き、半信半疑ながらも納得してくれた。

流石にゴンと違ってすぐには信じてくれないか。まだ警戒とわずかな緊張を肌で感じてるし。

「ゴールも近いようですし、一緒に行きませんか？」

「……いいのかよ。入れ違いでゴンがヒソカの方に行っちゃったぞ？」

「信じてますから。あの三人なら最悪殺されることだけはないとね。それに三人とも、ボクより強いですし」

ふーん。ま、いいけど。などとキルアはあっさりしたりアクションを返す。

その後、ボクたちは悠々とサトツさんの後まで追いつき、そのまま二次試験会場へと到着した。

キルアとニコルに市販ながらも美味しいサンドイッチを振る舞って待っていると、三人がボクたちを見つけてやってくる。

ゴンたちにも食事を出しながら、手傷を負っているレオリオを診察した。したんだけど、レオリオ、そこまでも原作通りだったのか……。マジでゴメンね。

ヒソカに殴られたであろう頬がとんでもなく腫れ上がっているのを見て、ボクは先ほど発動した《感》の文珠でギタラクルの動向をチェックした。

よし、今はこっちに意識を向けてないな……。でもかなり危険なのは変わらない。取り敢えず《遮》の文字でこの場に集まった六人

を周囲から隔離すると、《治》の文珠で腕の傷と一緒にレオリオのダメージを治癒する。

「っ!？」

ゴン、クラピカ、レオリオに、先ほど文珠を使用したニコルはこの事象に驚かなかったが、やはり初見のキルアは驚愕を禁じ得ないようだ。

「よし、これで大丈夫です。まだ痛いところがありますか？」

「いや、問題なんてねえよ。助かったぜシェリー」

クラピカの野郎なんて俺の顔見て無事なんて言うんだぜえ、とレオリオがぼやきに、クラピカの方を向くと彼はわずかに目線をずらした。

うん、クラピカの中でレオリオの顔って殴られても大差ないイメージってことだね。ボクはレオリオの不憫さに心の中で合唱した。

「……みんなで和んでるトコ悪いんだけどさ、シェリーが今ナニしたのか教えてくんない？」

キルアの探るような、いやどつちかっていうと仲間はずれにされて拗ねるような口調の質問に、残りの四人が一斉にボクの顔を見る話していいのか、どうするのか、と。

まあ、ボクの固有能力だし、ボクに断りもなく暴露なんてしないか。みんな誠実で、心底助かります。

さて、キルアに教えるのはいいんだけど、ギタラクル と
とかイルミッゾルディックが問題なんだよねえ。

下手に教えると、この場にいるキルア以外の全員がああ針男に殺

されるかもしれないのだ。

迂闊な真似はできない。できないんだけど……ボクの靈感が告げている。この場は教えてしまえ、と。

いざとなったら《超》《加》《速》で不意を突いて、《転》《送》《で海のご真ん中に放り出すか。たぶん死なずに陸まで辿り着くだろうけど……。

「これは言ってみればボクの切り札に当たりますが（でもポンポン使っちゃうけど）、キルアなら教えてもいいですよ。ただ、教えるにあたって少し非常識な方法を取らせてもらいたいです。あ、でも決して危害を加えるような方法じゃありませんよ？ もしまだボクを警戒しているなら、この場は止めておきますが」

「……………はあ、それってゴンたちに教えたのと同じ方法ってことなのか？」

「はい」

「ならいいや。その方法で試してよ」

「承りました」

そうしてお馴染みになった《伝》の文字を文珠に込め、キルアに使用して知識を写す。

あ、いきなり自発的に【纏】を修得しちゃったよ……………これが才能か！！ これで無邪気にはしゃがれたら、ちよっとム力つくかもかも。

そんなボクの考えとは裏腹に、キルアはじっと【点】をするように静かに瞑目して、己の身に纏うオーラの把握に努めていた。

「……………兄貴のアレは【練】だったんだな」

「あ、キルアのお兄さんも念能力者ってこと？」

「ああ、絶対そうだった。今までことあるごとに兄貴から出てた嫌な感じ……………念の知識に触れたら今なら、当たり前前に説明がつくな。ちつくしょー、こんなのあるならさっさと教えろっつの」

「秘匿技術ですから。それに身体が出来上がっていない内に念能力を覚えると基礎体力が疎かになりがちですから。その辺りを考慮されて教えて教えられなかったんではないかと」

「結局ガキ扱ってことかよ」

「いやお前どう見たってまだガキだろ」

「オッサンのレオリオよりマシだろ」

「おまつ……………まだそのネタ引き摺るのかよっ！！」

と繰り返されるキルアとレオリオを尻目に、クラピカとゴンがニコルに誰何していた。あ、そういえば紹介するの忘れてた。

「申し遅れました。ワタシはニコルと言います。一次予選で脱落しかけたところをシェリーさんのおかげで持ち直すことができ、こうして二次試験会場まで辿り着くことができました」

「え？ あんた、あんなので脱落しかけたの？」

キルアの言葉の暴力に、ガックリと肩を落とすニコル。そりゃキ

ルアからしたら大人と赤子ほど体力に差があるからなあ。認識の違いって怖い。

「キルアが規格外なのは発汗すらしていない様子から見て取れるが、常人レベルの体力では地下道の段階で脱落してしまうのも無理はない」

クラピカはニコルの物腰から、暗に一般人に毛が生えた程度の実力なのだとわかったらしい。

そういう意味でも、なんでニコルを助けたのがクラピカにはちよつと疑問なのだろう。

それでもあつさりと念を伝授したボクのことだからと、なんとはなしに納得もしているようだ。

「じつはトンパを攻撃した時に、情報収集も兼ねて彼の記憶を盗み見たんです」

当然嘘だけど。ボクは掌上の《読》の文字が込められた文珠を見せる。この文字が判るのが大半だろうけど、見たことのない文字の意味がそういうものと眺めている。

「その時の記憶で、ニコルについてのトンパの印象から、彼が情報収集に関しては今回の受験者の中でトップクラスだと見受けたので、協力できたら全員の合格の可能性が増えると思って誘った次第です」

それに見捨てるのは惜しい逸材とも思ったので。と、善意ではなく打算まみれの理由を話す。

ニコルも決してバカじゃない。それぐらいの意図は読んでいたのだろう。それでも嫌な顔をせず、にこりと微笑む。

「ワタシはシェリーさんのおかげでどん底から這い上がることができました。だから、できることでお役に立てるなら進んでさせてもらうつもりです」

「ではルーキー一同、全員の合格を目指して乾杯しましょうか」

ボクは荷物から人数分のジュースを出した。そして、みんなが提案を断ることなくジュースを手にとっていく。

一番接点のないキルアも、まあいつか、と念についてレクチャーした甲斐もあって、乾杯に参加するためジュースを受け取る。

こうしてボクたち六人は、缶を叩き合うとプルトップを開け、和気藹々とジュースを飲み干した。

No.005 「何回目かのブレイク行為」(後書き)

とまあ、ここでニコルが仲間に加わり、キルアに念を教えちゃいました。

あと、ギタラクルさんは逆に《遮》の文珠が発動したことで異常に気付いちやってます。

おまけに二次試験が始まる頃には【纏】までいってるので、とぼけるのも不可能！

ホント、どうするんだろうねえ……。

No.006 「あれ、ニール？」

「二次試験後半、あたしのメニューは スシよー！」

場違いなほどにしゃっきりした口調で告げられたのは、そんな言葉だった。

周囲にどよどよと疑問の聲が蔓延する。いや、これはもう、「ざわ……ざわざわ」ってぐらいざわついていますな。

「ふふん。大分困ってるわね。ま、知らないのもムリないわ。小さな島国の民族料理だからね。 ヒントをあげるわー！ 中を見てごらんさ いー！！ ここで料理を作るのよー！」

続いて告げられるのは、本当にヒントにしなければならないヒント。もう、それで分かれて舐めてるとしか思えないぐらいの傍若無人な説明だった。

無知は罪？ なんかすんごいイイ笑顔で課題を出す試験官 美食ハンターのメンチさんを見てると、謙虚な態度に出るのは一苦労だと思う。

ボクは原作知識で知ってるから、おまけに前世が日本人だからよく知ってるけど、この場でそんなものをちゃんと知ってるのは出身地の伝統料理であるハンゾーぐらいのものだろう。

「それじゃスタートよー！ あたしが満腹になった時点で試験は終了ー！ その間に何コ作ってきてもいいわよー！」

こうして二次試験後半、参加人数70名によるクッキングテスト

が開始された。

え？ 一次試験どうしたかって？ 多くは語るに及ばず、的な？
ざっとまとめると、六人で協力して人数分のグレイトスタンプを
仕留めて、《焼》の文珠で六頭分を一気に丸焼きにしたのだ。

そんなわけで焼き時間を大幅に短縮したボクたち六人は真つ先に
一次試験に合格したというわけ。文珠チート乙ですね。なんかもう、
文珠に頼り切りだなあ……。

「ニギリズシですか。これは難しいですね……」

「ニコルはスシを知ってるの？」

「ええ、説明するので、静かに集まって頂けませんか？」

小声で囁かれたニコルの言葉に、ボクたち六人が互いを壁に円陣
を組む。むろん、レオリオにはおクチにチャックを徹底させた。原
作みたいに勝手にバラされたら堪りませんって。

「スシというのはジャポンという島国に伝わる伝統料理の一つです。
今画像と調理方法のページを出しますね」

ニコルは片手で、指が残像で見えなくなるほど素早くキータッチ
をし、すぐさまボクが前世で知る「鮓」の文字と写真とともに、詳
細な情報が画面に表示された。

おおっ、と限りなく静かに、ニコル以外が感嘆の吐息を漏らす。

「ふむ、私も文献で読んだ程度で具体的なカタチや詳しい調理法は
知らなかったが。それをこの場で活用できる事前準備と情報収集の
腕は、確かにシェリーの言った通り今年の受験者でトップクラスだ
ろうな」

「恐縮です」

「よっしゃあ、これでこのテストもオレらがトップで合格できるな
っ」

レオリオが会心の笑みを浮かべる。ここまでヒソカの虐殺を除いて試験自体は順調なほど順調に進んでいるため、この試験のスシ作りもすでに合格した気でのだろうか。まあ、すぐ調子に乗っちゃうのがレオリオだね。

「残念ながら、その可能性は極めて低いと思います」

ニコルが画面の一部を指さした。そこには「まともにものにするのには十年は修業の要る料理」という文章。思わずレオリオとボクが吹き出し、ゴン、キルア、クラピカの三人が半眼でメンチの方を見る。

「……ナニ考えてんだアイツ」

「十年も修業なんて今からじゃ無理……あ、シェリーできない？」

「いや、流石に時間をかければいいってもんでもないでしょうし……」

キルアはメンチに呆れ果て、ゴンは加速空間のことを知ってるのでボクに訊ねる。しかし待ってほしい。この説明ページと独力で十年かけるほど、この試験は重要じゃないのだ。

原作知識のカンニングで、試験が変更されるのをボクは知っている。だからそれを待っただけでいいので、ゴンの質問に言葉を濁した。

「最終的には大丈夫だと思いますよ」

そこへ、ニコルが不敵な笑みを浮かべ、残る全員に自身の分析を述べる。

「ご覧の通り、たいへん難しい課題です。おそらく料理場の設備からヒントを得、受験者の注意力、観察力、そこから論理的に答えを導き出す考察力が問われる試験です。しかし、ここで一つ致命的な問題があります」

ニコルは試験官であるメンチの方へ視線を向ける。

「試験官が美食ハンターメンチであること。彼女が審査員というのが非常にまずい。

ワタシの調べた情報によると、彼女は今回の試験と似たような形式のクイズ番組の審査員を経験したことがあります。その時、彼女は審査員としてではなく純然たる料理人として参加者の料理を味わい、その尽くを不合格にしました。

他さまざまな情報から彼女の性格を分析した結果、この試験も似た道を辿る可能性は極めて高いです。さらに

今度は視線をメンチからハゲであるハンゾーに移す。

「294番の彼は、信じがたいことですが忍者のようです。忍者はジャポンに伝わる職業で、出身地である彼にとっては地元の料理。あの様子から知っているのは間違いないようです」

ハンゾーは周囲の様子をチラ見して、しきりに含み笑いを続けていた。うん、趣味が悪い。

「見たところ全く忍んでない態度は一目瞭然。他の受験者が彼に注目することで、そこからスシの内容が受験者全てにバレる可能性が高い。そうなれば、あとは誰も彼もがスシもどきを作って審査を受けることになるでしょうね。そんな情況に陥ったなら、料理人である彼女はそうそう合格なんて出すはずがありません。純粹に味で合否を決めるでしょう。そうなれば」

「合格者は誰一人出ない、ということですか」

ニコルの言葉を引き継いだボクのセリフに、他の四人がうげえつと不満顔になる。

それにしても、原作知識のないというのにここまで完璧に推測するのは、ニコル、君のことをかなりナめてました。ごめんなさい。

しかしメンチってTVに出たのね。まあ顔が美人だし胸もデカいし、おまけに一つ星ハンターですもんね。でもそんな顔の売れる仕事して大丈夫なのかなあ？

まあ、この世界じゃ生まれた瞬間からDNAが登録されるような世界だし、金さえ払えば顔情報なんてあっさり手に入るんだから、売れようが売れまいがハンターとして活動する以上関係ないのかな。

「あくまでワタシの予想に過ぎませんが、そうなる可能性は非常に高いと具申します。もしそうなった場合、おそらく別の審査に内容が変更されるはずですので、それを狙いつつ、過程の評価に備えて材料を調達に行きませんか？」

ボクたちはその提案に否もなく、全員【絶】で試験会場を抜け出し、川へと向かった。

ボクたちは他の受験者の妨害を警戒して（個人的にはギタークル対策で）、六人一緒に魚を捕まえる。え？ 方法？ ゴンに釣りをさせるなんて時間のかかる真似しませんよ。

ボクはバスケットボール大の小岩を持ち上げ、水面から覗く岩にそれをぶつけた。暫くして、気絶した魚がぷかりと浮き上がってくる。うん、大漁大漁。

「シエリー……確かに効率的だが、その方法は」

「ちえー。オレが釣るより速いだろうけど」

「シエリーってこういう時思い切ったことするよな」

「いいんじゃない？ 時間勿体ないしおまえらも捕まえるよ」

「ふむ、淡水魚なので寄生虫のいる魚ばかりですね。皆さんもし食べるならちゃんと火を通して下さい」

「……………あれ、よかれと思ってやったんですが」

釣りの浪漫？ そんなもん知りませんよ！ 三人の良識的な視線から逃れるように、ボクはハンスオブグローリーで魚を掴み揚げていく。

初見のキルアが口笛で感心する中、乱獲によって得た大量の川魚を戦利品に、ボクたちはその場を後にする。

会場に戻る途中、他の受験者がわらわらと河原へ向かって駆け出

して行つた。あのハゲ、もしくはメンチさん？ どっちかがバラしたな。ブハラさんはそういうミスしなさそうだし。

ボクたちは適当に調理して、各々が握ったスシを審査してもらおう。結果は全員不合格だったけどね。

その後は詳細な答えをハゲゾーが暴露しやがったせいで、もうあの祭りである。

ボクたちはテキストにニコルのモバイルから調理法を検索し、手軽な魚料理をこしらえた。

あとは白ご飯もあるし、久々に和風テイストの食事に取りつけて万々歳である。

魚自体はいっぱいあったけど、結局は六人で全部平らげてしまう。しかし白ご飯はまだまだいっぱい残っていた。

ボクは容易していたタツパーにどんどん詰め込みながら、ぼやかすにはおられない。

「グレイトスタンプの肉を少しは確保しとけばよかったですね。ジヤポンには豚丼という豚の焼き肉をご飯に載せる料理があるみたいなんですけど、これだけ白ご飯があるのに勿体ないです」

「そっぴやそうだな。あの豚もあのデカいのが旨そうに食ってやがったし、俺も食いたかったなあ」

「今から獲りに行くのは不可能ですね。養殖もされているようなので、試験が終わってから打ち上げなりで食べればいいと思いますよ」

「じゃあみんなで合格したらパーティーだね！」

「そだな。おまえらも合格したらパーティーやるっぜ」

なにげにキルアは自分だけは絶対に合格すると思ってるなあ。原作通りに行くと逆にキルアだけ不合格なんだけど……さて、どうなるのやら。

それから暫くして、二次試験はメンチの独壇場で終結し、レスラーもどきのロン毛が襲いかかってブラハさんに迎撃されてしまう。うわー、念なしで人ってあんだけ飛ぶんだ。そういえばゴンが試しの門（1つ目）の腕力で人間を何メートルも吹っ飛ばしてたな。そう考えると、ブラハさんレベルでもフツー？ 手加減した可能性が大だから、弱いイメージないんだけどね。

そうこうしてる内に、連絡を受けたネテロ会長が飛行船から飛来し、会場前の広場に現れた。

ネテロ会長を見て、限りなく自然な【纏】に感動すら覚えた。うん、あれはホントに化け物だ。なんというか、どこにでもいるヒビ爺に擬態しているけど、ボクの霊感が告げている。とんだ狸だと。狸の皮の裏でほくそ笑む魔獣である、と。

ボク以外の五人は、ネテロ会長の能力である百式観音の知識も持っている。ゆえに、好々爺然とした目の前の老人と世界最高峰の強化系能力者との印象の差に、注視せざるを得ない。

ボクたちが彼を観察していると、ネテロ会長に諭されて己の非を認めたメンチによって、ようやく試験内容が変更されるはこびとなつた。

そして向かうのは真つ二つに断られたようなマフタツ山。そこへ飛行船で向かい、案の定であるが、断崖絶壁からコードレスバンジー大会が勃発してしまった。

ボクとニコルはちょっと二の足を踏んだけど、四人についていく

ため二人揃って飛び降りた。ハンスオブグローリーを伸ばしてニコルと糸をキャッチし、何とか全員でクモワシのゆで卵を美味しく頂く。一つ余計にくすねたので、あとでこっそり食べよう、ウフフフ。

№ 0006 「あれ、ニール？」 (後書き)

ちょっと短かったのですが、キリのいいところで切っちゃいました。

No.007 「彼女は危険人物？」（前書き）

動きすぎて印象が悪くなっています。口調からして胡散臭いですしね、
オリ主って。

No.007 「彼女は危険人物？」

現在、三次試験会場へ向かうハンター協会の飛行船、その操舵室では二次試験合格者が集まっていた。

「残った43名の諸君に改めて挨拶しところかの。わしが今回のハンター試験審査委員会代表責任者であるネテロである」

寝てる、をもしった名前なら、オキロ（起きろ）って人もいるのかな？

そんなバカなことを後ろの方で考えてると、

「なんともいえぬ緊張感が伝わってきていいもんじゃ。せつかくだからこのまま同行させてもらうことにする」

うわっ！？　なんかギタラクルの殺意と同等の怖気に襲われる。

うん、その正体はジジイ、おまえだ！！

紅一点、とは言わないが、残った受験者の女性陣の中ではボクが一番のプロポーション、らしい。なんというか、靈感に囁くのだ。好色な目で見られている、と。

受験者ってハンター試験目指してるのがほとんどだから、そういう目線でボクを見る余裕のある奴ってそうそういな……あ、ヒソカがいたっけ。アレにはまだ目を付けられてないと信じたいところだけど……わりと視線感じるんだよなあ、変態め……ファック。

マメインさんの説明も済み、ネテロ会長の挨拶の場は終了した。

解散後すぐにキルアとゴンが飛行船の中を探検しに行こうとしたので、思わず二人の襟首をひつつかんでしまった。

『うぐえっ!?!』

「いやいや、この後は修業したり休息するなり、相談したりとやることなすこといっぱいあるんじゃないですか?」

ぶらーんと猫みたいに掴み揚げた二人に、ボクは溜息混じりに話しかける。

「いいだろ別に。休息なんてオレ必要ねーし。だいたい、試験中に修業しなきゃいけないほど弱くねーぞ」

「ごめんシェリー。でもオレ、今はキルアと一緒に探検したいんだけど」

子供かコイツラ……って子供だった。

うーむ、ギタラクル対策のためにキルアには四六時中ずっと側にいて欲しいんだけど、流石に探検まで付いていくのはボクのキャラ的に不自然過ぎるよね。

……………そろそろ何か対策立てるかな?

「では一時間後に合流ということで、今は自由時間でいいんじゃないじゃありませんか?」

ニコルが苦笑しつつ提案する。ボクは原作と違って【纏】の恩恵で疲労の薄いクラピカとレオリオの方を見やった。

「私もそれでいいと思う」

「ああ、行かしてやってもいいだろ。お前がその気になりや時間なんて幾らでもあるんだしよ。あんまガミガミ言ってもんじゃないやねえぜ」

アレ？　なんかボクが折檻ママな位置づけ？　第一ガミガミ言っ
たつもりなんてないヨー！！

ちよっぴり複雑な気持ちを顔には出さず、溜息を吐くとボクは二
人を放した。

「では二人とも、一時間後にも合流してもらえますか？」

「おー。一時間あったら全部見て回れるな」

「うん！　それぐらいだったら大丈夫だよ」

そう言って二人は風の子のように消えて行った。　元気だなあ……。

Side: 試験官ズ(三人称)

審査員用の控え室となった貴賓室の一つでは、一次試験と二次試
験を担当した三人のプロハンターが食事をしながら受験者について
誰が合格するのか談議を交わし合っていた。

「ねエ。今年は何人くらい残るかな？」

まるで競馬新聞片手に話すような、面白げな口調で訊ねるのは、二次試験後半戦に参加した受験者全てに料理キチガイと印象づけた女傑、美食ハンターメンチ。

それに答えるのは、大柄過ぎるほど大柄で巨漢の二文字しか似合わない体格の、同じく美食ハンターのブハラだった。

「合格者ってこと？」

「そ。なかなかのツブぞろいだと思うのよね。一度全員落しとしてごういうのもなんだけどさ」

全くである。審査員として起用するならば審査委員会はもう少し、試験の審査を担うハンターの人格（性格）の調査もしておくべきだろう。

でなければ、今回のように審査員の情動による横暴で受験者があっさり全滅する珍事が、これからも起こるだろうことは想像に難くない。

もっとも、理不尽な試験内容に対応することこそが、ハンターの資質が問われるということなのだろうが、今回は流石にメンチの性格に問題があったというのが受験生のほぼ全てに共通する認識だった。

「でも、それはこれからの試験内容次第じゃない？（メンチみたいな試験官じゃ一人も残れないだろうし）」

「そりゃまそーだけどさー。試験してて気付かなかった？ けっこういいオーラ出してた奴いたじゃない」

「サトツさんどお？」

話を振られたのはこの場で唯一黙して食事をしていた、髭が特徴の試験官サトツである。

又メーレ平原横断マラソンのせいで、フツの感性を持った受験者たちの受けはとにかく悪い。

「ふむ、そうですね。ルーキーがいいですね。今年は」

「あっ、やっぱりー！？ あたしは294番がいいと思うのよねー。ハゲだけど」

(ジャポン出身者だからかな)

「私は断然99番ですな。彼はいい。405番も捨てがたいですが二人とも先が非常に楽しみです」

サトツは今回の受験者でツートップに輝く原石の未来に思いを馳せた。

予想外に豊作だったため興味が勝り、三次試験まで付いてきてしまったが、残ってみて正解だったと彼は確信していた。

「405番はともかく99番はきつとワガママでナマイキよ。絶対B型！一緒に住めないわ！」

「そーゆー問題じゃ……」

「ブハラは？」

「そうだね ……ルーキーで一番異質だと思ったのは406番かな」

「あの娘？ アレは駄目ね。見た感じイマイチ目にやる気あるようには見えないし」

「そうかな？ 彼女ってルーキーで組んでるあの六人の中心人物っぽいし、何かあると思うんだけど」

「そうですね。彼女はある意味、最もハンターに相応しくない人種かもしれません」

サトツは目を閉ざし、静かに口元をナプキンで拭いながら、406番 シェリーについて己の意見を述べてゆく。

「お二人が見てわかる通り、403番、404番、405番、406番は念を覚えています」

「そうだね。あと99番と187番もだけど、みんな見た感じ覚えてたてみたいだよな」

「そうね。オーラの質自体は綺麗なんだけど、まだまだ【纏】が粗いし初心者丸出しよね。それがどうかしたの？」

「一次試験開始時には99番と187番は精孔を起こしていませんでした。そして、私が担当した試験のゴール手前で406番と187番が瞬間移動で追い着き、その時には187番は【纏】を修得していました。そして一次試験が終わるまでの間に、99番は念について知っているそぶりを見せておらず、当然目覚めてもいませんでした」

『！』

サトツの言うことが正しければ、187番は一次試験中に、99番は一次試験終了後から二次試験開始時までの間に精孔を開き、そのまま【纏】を修得したということだ。

そして二人の精孔を起こしたのは、406番。いや、あの六人組のチームは全員が全員、揃って【纏】が未熟なのだ。もしかしたら403番、404番、405番の三人も試験会場に到着するすぐ前に【纏】を覚えた可能性がある。

「今年は確かに豊作です。特にルーキーの質は、44番という例外も合わせて近年稀と言つていい。その中で前途有望且つ「使える」と判断した人間に念を覚えさせ、仲間にする事で試験結果を優位に運ぼうとしているのではないか？ そう私には思えるのです」

ところどころ穴のある意見であったが、戦闘向けではないレベルの低い念能力者にとっては、なかなか合理的な計画ではないだろうか。

能力によるものなのか、406番が明確に粒　原石である新人たちを選別しているのは疑いようのない事実だろう。

さらにもし操作系能力者ならば、他者を操る能力を開発することで、受験者を駒として運用することも決して不可能ではない。

そこまでしているかはともかく、受験者に念能力者がいた場合のために、数回に分かれた各試験の中にはそういった使える者用の試験が混ぜられる。その時に化けの皮が剥がれるのではないか。

「無理矢理起こしてあっさり【纏】を覚えられるような新人クンたちを見つけては、次々と抱き込んでるってどこ？　言ってみれば逆ヒカルゲンジハーレムか。見返りにポンポン念能力を与えるってのは、確かに減点対象よね。裏ハンター試験舐めんなつての」

「うーん、秘匿技術って知らないのかな？」

「無知は罪よ。知らなかったなんて言い訳は甘えでしかないわ。ンで、知っててやってるなら余計に夕チが悪いわよ」

「私は個人的に応援するルーキーを見届けるのと同時に、406番を見定めるために最終試験まで付いていこうと思っています。お二人はどうされますか？」

「ん ……そうね、あたしらも残ろっかな」

「どうせ今ヒマだしね」

あまり間違ってもいない酷評はそうして締め括られ、審査員たちは仮眠のために用意された個室へと入っていった。

S i d e O u t

No.007 「彼女は危険人物？」（後書き）

次回は最終兵器、怪人針男と対峙します。逃げて…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1143u/>

文珠使いになってハンタ世界へ

2011年6月20日06時33分発行